

イザヤ書 35 章 4-7a 節

ヤコブの手紙 1 章 27-27 節

マルコによる福音書 7 章 31-37 節

先週、皆様のお手元に、公禱の礼拝再開を9月19日（日）からといたしますという趣旨のお葉書が届いたと思います（先週の説教の冒頭では、12日と言ってしまったかもしれません）。また、9月14日（火）から、毎週午前10時より聖餐式と聖書を学ぶ会も始める予定です。教会の活動全体の再開は、もう少しかかるとは思いますが、出来ることから再開し、また新たな試みも行っていきたいと思えます（礼拝中継はしばらく続けます）。

先週の福音書は、ファリサイ派の人々や律法学者たちと、イエス様が議論するお話でした。その場所は、ゲネサレトで、それはガリラヤ湖西岸の場所です。物語の流れでは、イエス様が、「**そこを立ち去って、ティルス¹の地方に行かれ**」ています。聖書日課では、そのティルスの地方でのお話（マルコ 7:24-30「シリア・フェニキアの女の信仰」）が省略されています。しかし、このティルスでのお話は、本日のお話とつながっています。それゆえ、本日も、その部分を補いながら、福音書を中心に学んでいきたいと思えます。

ティルスは、ガリラヤの北に位置し、もともとはフェニキア人の港湾都市国家ですから、異邦人の町です。現在のレバノン共和国に位置しますが、ティルスの地方とは、異邦人の土地です。それまでのイエス様の活動は、デカポリス地方を除き、ガリラヤ地方が中心でしたが、ここで改めて、異邦人の土地で活動されたのでした。

ティルス地方の物語では、イエス様に何度か断られても、「**主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます**」（7:28）と、自分の娘の癒しを願う、シリア・フェニキア出身のギリシア人女性の姿が、特徴的です。この女性の姿は、信仰についての大切なポイントを示しています。それは、自分のための信仰ではなく、他者のための信仰ということです。この女性の他者のための信仰という点が、五千人、四千人の食事のお話とも（パン屑という言葉は異なりますが）、本日のお話とも共通していると思えます。

本日の福音書は、「**それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた**」（マルコ 7:31）とある通り、ティルスから立ち去るところから始まります。これは、「**まとめの句**」と呼ばれる、物語の語り的手法です。たくさんの出来事があったことを短く表現する場合に用います。ここは特にイエス様の移動をまとめています。この移動が始まる前のシリア・フェニキアの女の物語は、おそらく1～2日の出来事だと思えますが、この「**まとめの句**」は、数日分の移動と出来事を1節で語っています。移動距離が長いからです。ちなみに、イエス様の時代の1日移動距離は、30キ

ロとされています。

この「まとめの句」にある地域は、最終地点のガリラヤを除いて、異邦人の地域です。イエス様は異邦人の地域をこれだけ移動し、同じ様な出来事があったことを暗示しています。しかし、すこし方向感覚がおかしいところがあります。なぜなら、「ティルスの方を去り（約 40 キロ北北東に進み）、シドンを経て（約 120 キロ南南東に進んで）、デカポリス地方を通り抜け（北西に約 10 から 20 キロ進んで）、ガリラヤ湖に向かった」という動きになるからです。確かに、そのように進むことは可能ですが、最終地点のガリラヤ湖に進むのであれば、いったんガリラヤ湖のあるガリラヤ地方を通ったこととなります。しかし、そうは書いてありません。またもしガリラヤ湖のあるガリラヤ地方を通ってなければ、かなり大回り（ガリラヤ地方より北のイドマヤ、西のトラコンを通る）したことになるのですが、そのようにも描かれていません。

これらのことから、この箇所は、その内容とは別に、「マルコによる福音書」の著者が、どれだけパレスチナの地理を知っていたか否かを問う根拠となる場合があります。パレスチナについて詳しい人であれば、このような不自然な表現にはならないと思われるからです。しかし、当時の人は、わたしたちが持つのと同じような方向感覚や正確な地図を持っていたわけでもありません。ここではこれ以上立ち入りませんが、少なくとも、この「まとめの句」から著者について正確に推測することはできません。そして、この「まとめの句」が示す大切なことは、正確な地理を述べているか否かではなく、異邦人に関するイエス様の活動です。イエス様は、異邦人の土地を通られたと語っているということです。

実はイエス様は、5章1節以下で、異邦人の地域であるデカポリス地方にあると思われる、ゲラサにすでに行っています。そしてそこでイエス様から汚れた霊を追放してもらった男は、「イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた」（5：20）とあります。また、ティルス、シドンという地名は、イエス様はその時点ではまだ行っていないのですが、「エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドンの辺りからもおびただしい群衆が、イエスのしておられることを残らず聞いて、そばに集まって来た」（3：8）という表現で、イエス様の周りに集まった人々の出身地として描かれています。これらからこの「まとめの句」は、シリア・フェニキアの女性との出会いが契機となって、イエス様は異邦人の住む場所にも向かわれたということを要約して語っているのだと思います。ただしそれは、異邦人伝道というような表現になる特別な行動ではなく、異邦人かユダヤ人かを超えて、またどこに住んでいるかを超えて、神様の救いを求めている人にイエス様は会いに行かれたと示しているのだと思います。全世界への宣教とか異邦人への宣教というような事柄ではなく、自分を必要とされる人のもとへ、イエス様は会いに行かれた、それは、ユダヤ人の住む場所に限らなかった、単にそのことを語っているのだと思われます。見方を変えれば、イエス様に対する信仰をもったのは、ユダヤ人だけではなかったということです。

ガリラヤ湖付近へ戻ってきたイエス様は、ここでも奇跡を行います。「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った」(マルコ 7:32) からです。その地の「人々」は、イエス様が来られたと聞いて、苦しんでいる自分の隣人を連れて来たのでした。この短い描写にも、大切なポイントがあります。それは、「人々が願った」という点です。何を願ったのか、それは自分たちの隣人に、手を置いてもらうことでした。「手を置く」とは、この文脈では、日本語の「手当て」と同じく、治癒を意味します。彼らがイエス様に願ったことは、隣人の救いでした。

イエス様は、彼らの願いにこたえ、「耳が聞こえず舌の回らない人」、「この人だけを群衆の中から連れ出し」ます。そして「指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッフアタ』と言われ」ます(マルコ 7:34)。

イエス様は、異邦人世界の呪術師や魔術師と異なり、言葉だけで奇跡を起こす、そのようにいわれる場合があります。しかし、ここでは、呪術に近い行為を行っています(この部分だけで判断すれば「共感呪術」そのものといえます。また、この「エッフアタ」という言葉には、「これは、『開け』という意味である」と注釈があります。これは明らかに、「エッフアタ」がアラム語であるため、読者がわからないことを想定しているからです。「マルコによる福音書」が書かれた一世紀の半ばころです。その時点ですでに対象となる読者が、異邦人であったのです。ここから推測すると、先ほどのイエス様が異邦人の地域でも活動された、という31節のまとめの部分は、ユダヤ人とは異なる感覚で、異邦人がイエス様を、身近に感じる事ができた部分かもしれません。

さて、奇跡が終わった後、イエス様は、「人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされ」ます。この表現は、先の「この人だけを群衆の中から連れ出し」という部分と合わせて、イエス様は、奇跡を秘密にしようとしていることを示している、と言われることがあります。確かに、イエス様が、自分の奇跡を秘密にしようとした個所は、他にもあります(1:44、5:40など)。しかし、すべての奇跡行為が、そうであるわけではありません。沈黙を特に命じていない個所もあります(1:21-28、2:1-12、3:1-6など)。これらのことから、ここにある口止めの指示の意図は、奇跡を秘密にしようとしたことではないと思います。

それではなぜ、イエス様は、ここで口止めしようとしたとされた、と記述されているのでしょうか。その答えは、「イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえってますます言い広めた」という記述にあります。そこに描かれているのは、イエス様が口止めされたにもかかわらず、隣人が救われたことを伝える人々の姿です。イエス様が口止めしようとしたという記述は、禁止が目的ではなく、イエス様が禁止しても、人々は、隣人が救われた喜びを、隠すことができなかつた、そのことを示す語りの手法だと言えるのです。

ただし、ここで注意すべき点の一つがあります。「言い広めた」と訳されている

言葉です。訳が間違っているのではありませんが、この言葉は、「宣教する、宣べ伝える」ということも意味もあります。「宣教する、宣べ伝える」と「言い広める」とでは意味が異なります。新しい「聖書協会共同訳」では、「宣べ伝える」という訳を提案したのですが、従来通りとなりました。ここの「人々」は、十字架と復活前のイエス様を見ていないので、信仰がないという解釈が根強いのです。しかし、彼らは、自分たちの隣人の癒しを願い、それが実現したことに驚き、素直に喜び、イエス様をたたえています。彼らには信仰があり、また、イエス様と主なる神様について、「宣べ伝えている」と思います。

「マルコによる福音書」が、十字架と復活の出来事を、わたしたちの信仰にとって、最も大切な事柄であると示していることは確かです。その出来事において、イエス様が、どのようなメシア・キリストであるか示されるからです。そして、そのことを伝えることが教会の宣教である、そのことも間違いではありません。しかし、宣教とは、それがすべてではない、本日の福音書はそのことを伝えていると思います。

いま苦しんでいる隣人のために願うこと、その苦しみを、自分たちの力で、解決することができなかつたとしても、自分たちができることを行うこと、少なくとも主なる神様に祈ること、そのことも宣教である、そのように本日の物語は、語っていると思います。そして、もし、その隣人が、何らか形で救われたならば、自分のこととして喜ぶ、そのことも宣教に他ならない、そのようにも伝えていると思います。

今日、「伝道」という言葉と、「宣教」という言葉を明確に区分しようという考えがあります。これは言葉としては、日本語に限ってということでもありますが、概念としては、世界の教会で問われている事柄でもあります。また、「伝道」と「宣教」は、聖公会だけではなく、日本の多くの教会であいまいなま用いられています。その意味では、言葉の起源にさかのぼっても、定義できないかもしれません。ただし、現時点では、「伝道」を狭い意味で何かを伝えることあるいは行動すること、「宣教」は広い意味で何かを伝えることあるいは行動すること、という理解はあるようにも思えます。それでは目的語は何でもよいかというところではありません。それが「主なる神様について」あるいは、「主なる神様の愛」がなければ、「伝道」にも「宣教」にもならないからです。また、目的語が「自分の思い」、「自分の行いたいこと」、「自分の実現したいこと」と人間側の「自分の」という思いが強い時、たとえ周囲に住む人がどれほど喜んでくれたとしても、それは「伝道」でも「宣教」でもありません。それは、主なる神様が建てた教会で行わなくてもよいからです。教会での活動は、常にそのことを考えることが大切です。

わたしたちは、わたしたちの「東京聖三一教会」を宣伝するのではなく、また、教会を単に便利な場所として用いるのでもなく、「東京聖三一教会」を通して、「主なる神様の愛」を伝えたいと思います。そのための歩みとは何かを、これからも一緒に考えたいと思います。